様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２６０１

研究課題名（和文）信念と危機的経験の相互生成に関する人類学的研究：ヌエル難民の予言信仰を事例に

研究課題名（英文）Anthropological research on beliefs and war experiences: prophetic tradition among Nuer refugees of South Sudan.

研究代表者
橋本　栄莉（Hashimoto, Eri）

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：００７７４７７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、大規模な武力衝突と内戦を経験した南スーダンのヌエル社会を事例として、絶え間ない文化接触と複数の知や実践のせめぎ合いの中で、特定の社会で共有される信念がいかに生成・維持されるのかを明らかにすることであった。本研究では、ヌエル社会で語り継がれてきた予言や神話などの特定の信仰が、紛争や難民経験のなかで人々が出会った複数の論理や実践、例えば、植民期以降の政治権力や科学技術、キリスト教、近代教育、開発の思想などと絡み合いながら、戦後社会を生きる人々の共同体やアイデンティティを形成していることを明らかにし、その成果を民族誌としてまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
南スーダンの紛争後社会を生きる人々へのフィールドワークをもとに行われた本研究では、「脆弱」と一般に見なされる難民たちが、自らの文化的実践や知識を加工し、避難先で出会った新たな知や実践の体系と接合させ、新たな秩序や共同体、アイデンティティを形成する方法を明らかにした。危機的状況下で他者とともに生きる技法を記述した本研究は、人類の危機的経験を扱う人文学的研究および政策研究に対しても意義を持つだろう。

研究成果の概要（英文）：The aim of the study was to identify how beliefs are generated and maintained in a particular society in the context of cultural transformation and the struggle between multiple knowledge and practices, by looking into the case of the Nuer society in South Sudan, which has experienced large-scale armed conflict and civil war. The study shows that certain beliefs, such as prophecies and myths passed down in Nuer society, are intertwined with multiple logics and practices that people have encountered in their conflict and refugee experiences, such as post-colonial political power, science and technology, Christianity, modern education and ideas of development, to form a community of people living in a post-war society and identities. The results were compiled into an ethnography.

研究分野：文化人類学

キーワード：アフリカ　難民　宗教　信念　危機的経験

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

ナイル川流域の諸民族集団の間では、精霊信仰をはじめとする占いや憑依、夢、予言などの在来の信仰が、文化接触によってもたらされた社会変容や国家規模の紛争体験を人々が解釈するための手段となってきた。なかでも南スーダンのヌエル社会で語り継がれてきた予言者に対する信仰や神話は、紛争・平和構築といった国家の政治軍事情勢に大きな影響を与え、人々が過去の内戦経験や現在の難民経験を語り、共有する手段となっている。1990 年代以降のアフリカ宗教研究では、アフリカ各地にみられる諸宗教現象が、近代化をはじめとする外在的な変化と相互関係を保ちながら展開・発展してきたことが指摘されてきた。既存の研究では、大きな社会変容と宗教的現象との相互作用はある程度明らかにされてきた。しかし、信仰それ自体に内在する論理、つまりいかなるプロセスを経て、特定の信仰に対する信念が維持され続けるのかという点については十分に議論されてはこなかった。

本研究の核心をなすのは、「絶え間ない文化接触と複数の知や実践のせめぎ合いの中で、特定の社会で共有される信念がいかに生成・維持されるのか」という問いである。西洋近代起源の合理性が相対化されて以降、人類学では、対象社会の特有の知の体系のみならず、それらがどのように西洋起源の知と絡み合い、人々の現実を生成してきたのかが問われてきた。近年では、現代社会が依拠する科学的言説をはじめ、人類の知や信念一般の生成過程が問題化され、もはや学問的「真実」や「事実」の存在すら自明なものとして語ることはできなくなった。現代社会における不安定な「真実」や人間の信念の生成過程を捉えるためには、特定の集団の中で「正しい」とされる知識が、どのような文脈や社会関係の中で、どのようなアクターによって再生産されてきたのかを捉える必要がある。

人類社会における信念と関連する研究として、アフリカ在来信仰の現代的状況に関する研究に加え、人文社会学分野における科学的知識や歴史的事実の生成、文化人類学的「真実」探究の研究に関する研究が挙げられる。信仰の内側にいる人びとの信念に着目する傾向がある既存の研究に対し、本研究では、複数の信念や想像力が交差する場として予言や神話を捉え、言説の外部にいる者までもが信仰へと参与してゆく過程を明らかにすることを目指した。また、現代の紛争と難民経験に関する国内外の研究では、移民・難民が移動先で形成する同郷コミュニティにおける宗教実践の重要性が指摘されている。しかし、既存の研究において在来宗教は「心のよりどころ」のような静態的・不変的なものとして描かれがちであった。これに対し本研究では、難民・紛争経験と宗教的観念とが実践や語りを通じて相互に変容し、また生成し合う局面に注目し、人々の紐帯が信仰を通じて再生する過程を明らかにすることを目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は、ナイル系農牧民ヌエル社会で語り継がれてきた予言や神話を事例として、特定の信念が、社会変動にともなう複数の知の枠組みの相互作用の中で編成されてきた過程を明らかにすることにある。本研究では特に、植民期以降の政治権力や近代合理主義的思考、科学技術やキリスト教をめぐる様々な論理や実践が、現在の予言や神話をめぐる信念を支えている局面に注目する。本研究は、アフリカ在来の信仰や知が、西洋近代的歴史観をはじめとする複数の時間観の流入とともに独自の言説空間を創り上げる過程を分析するものである。難民となった人々の語る予言や宗教実践を例に、このような信念・実践複合が、現代世界で生じている人道的危機とどのように相互に関連し、人々の危機的経験を形作るのかを捉えることを目指した。

この目的を達成するために、（１）南スーダンの既存の権力構造と予言者や神話の相互関係を歴史的に検討し、（２） 予言をめぐる信念を持続させるような要素を、難民となった人々の日常的宗教実践や、神性と予言の関係、特徴的な語りと人々の経験との関係から明らかにする。

３．研究の方法

本研究では、（１）南スーダンの民族誌的・歴史的史料の検討、（２）南スーダンおよびウガンダの紛争後社会・難民コミュニティで行った現地調査で得た資料の検討をそれぞれ統合しながら、様々な知の枠組みが取り込まれる予言や神話語りの特性や共通の言い回しを分析することを通して、人々が自らの経験を位置づけ、またその語りがどのように他者の経験をも取り込み、ある集団の中で歴史観・未来観が共有されてゆくのかを明らかにすることを目指した。

（１）によって、ナイル系諸社会の宗教的実践および民族集団を越えて流通する神話に着目し、歴史や地域に応じた変容プロセスと、新しい内戦における予言者の登場とその役割を検討した。その際、周辺の諸民族の信仰との差異と類似性を検討し、信仰のトランス・ローカルな側面を明らかにすることで、ヌエルのみならずナイル系諸民族の間で広がる精霊信仰や神話の歴史と動態を解明し、その中でヌエルの信仰や神話を再定位することを試みた。

（２）では、難民コミュニティにおける自助組織による神話の活用と、新たな民族アイデンティティ生成の関係、それらの実践や語りをめぐる人々の信念と葛藤について検討した。2013 年末に南スーダンで大規模な紛争が勃発して以降、多くのヌエル人が難民となり、予言信仰や神話は、難民となった人々の新たな社会関係や紛争経験の中で再編されている。様々な知の枠組みが取

り込まれる語りの特性や共通の言い回しを分析することを通して、人々が自らの経験を位置づけ、またその語りがどのように他者の経験をも取り込み、ある集団の中で歴史観・未来観が共有されてゆくのかを明らかにすることを試みた。

４．研究成果

研究方法（１）に関連して、①ナイル系諸社会に伝わる起源神話が、地域や民族集団内の下位集団、そして時代における共同体意識の形成や集団間関係の認識と深くかかわりながら変容していること、②内戦前後に台頭した地域の予言者が、現在の南スーダンにおける政治的軍事的権力者と癒着している一方、時として政治的権力者を否定しつつ大衆の側に立ち支持を得ていることを浮き彫りにした。

具体的な内容は以下である。

①起源神話の多くは「1 本の大木から人類が誕生した」というものであるが、この神話の変異系として「人類」が特定の民族やクランであったり、「誕生」の仕方とその後の人類の分離の在り方が、人々の当時の集団認識や歴史状況とかかわっていたことを見出した。

②では、近年発表された民族誌的資料が含まれる論文と過去の自身の調査研究とを統合し、予言者が「近代的ふるまい」と「伝統的ふるまい」を、特に政治・軍事的場面において使い分けていることを示した。

研究方法（２）に関連して、③難民・国内避難民の自助組織が、在来の政治・社会・親族システムと、近代的行政システムとを接合するかたちで成立しており、さまざまな背景を持つ組織・集団・個人に対応する能力を備えてきたこと、④難民社会で行われていた儀礼などの宗教的実践において、故郷で共有されていた規範や論理を維持しながら、避難先の新たな媒体が活用されていたこと、⑤故郷の起源神話が内戦後の新たなナショナルまたはエスニックアイデンティティの形成と関わってきたことなどを明らかにした。

具体的な内容は以下である。

③それぞれの自助組織は、分節リニィジシステムという在来の政治・親族組織を基軸にしつつ、その上部組織として、「チーフ」や「チーフ代理」「書記」「会計」といった植民地統治期、あるいは近代に導入された行政システムが存在していた。形式上はトップダウン式の組織であるが、実質的には各リニィジをまとめるリーダーのもとにまとまる、「一にして多」と言える特徴を備えた組織である。これによって、人々は難民居住区で接するさまざまな背景を持つ他者と関わり合うことが可能になっていた。

④南スーダンの村落社会において、婚資や賠償財、あるいは供犠獣として重要な価値を持つ牛を多くの難民たちは失った。難民居住地で牛が必要となる場面に遭遇したとき、人々は現金や植物など、さまざまな媒体に「牛」の要素を見出し、それらと牛とを同一視していた。

⑤故郷の南スーダンではほとんど話題に上ることのない起源神話について、難民たちはそれぞれのリニィジに伝わる神話をシンボルとして掲げ、一つのアイデンティティを共有する集団としてまとまろうとしていた。

また、研究目的との関わりは薄いものの、現地調査によって観察しえた、⑥難民となった若者の身体加工と伝統／近代をめぐる葛藤や⑦難民による演劇実践を検討した。

⑥では、成人男性の額に刻まれる瘢痕をめぐって、それが特定の民族出身であることを示すために殺害対象になってしまうことと、同時に瘢痕を有する男性に対する伝統的な「男らしさ」の価値も存在し、そのはざまでジレンマを抱える男性の姿を見出した。⑦では、民族や国籍を超えて形成された演劇サークルが、難民定住区で生じる諸問題を演劇の形で再演し、人々に問題について思考し問い直す機会を与えていることを発見した。これらの事象は、「民族」や「難民」をめぐる世界のイメージに対する難民自身の捉え方やメッセージを把握するうえで重要であり、同時に国際社会が前提とする「難民」や「民族紛争」をめぐる知を相対化することにつながることを指摘できた。

本研究で得た上記の成果は、多数の国内・国際学会で発表し、学術雑誌に投稿した。

具体的には、日本質的心理学会（上記の③および⑦）や国際開発学会（上記の③）、African Youth に関する国際共同研究のシンポジウム（上記の④）などで、ウガンダの難民コミュニティで行った調査結果の一部を発表した。また、難民の自助組織や共同性、身体とアイデンティティなどをテーマとした学術論文を執筆し、それらは『文化人類学』（上記の①、③、⑤）や『質的心理学研究』（上記の③および⑦）、『史苑』（上記の⑥）といった学術雑誌に掲載された。さらに、紛争後・難民社会における神話や予言の動態については、『季刊民族学　186 号』（上記の②）や書籍『聖性の物質性：人類学と美術史の交わるところ』（木俣元一，佐々木重洋，水野千依編、三元社）（上記の④）、『歴史が生みだす紛争、紛争が生みだす歴史―現代アフリカにおける暴力と和解』（佐川徹，竹沢尚一郎，松本尚之編、春風社）（上記の②）に章の一つとして掲載した。最終年度には、これらの研究に関する成果をまとめ、単著『タマリンドの木に集う難民たち：南スーダン紛争後社会の民族誌』（九州大学出版会）として出版した。

これらの研究成果は、以下の点で独自性と創造性、発展性を有していたと言える。

まず、人類学・人文社会科学分野における知や信念の生成に関する議論への貢献である。本研究では、それぞれの歴史・時間観が絡み合いながら生成される独自の言説空間や、出来事と構造

の関係を具体的な事例と共に示し、既存の歴史・時間観を前提とする議論に対し新たな問いを発してゆく点で独自性を有する。複数の価値規範や歴史観、技術やモノ、語りがせめぎ合いながらある信念が生成される過程を追った点について、人々の経験を編成する語りや実践に含まれるこれらの要素を分析することで、知や信念編成に関する議論に対し独自の視点を提起し、個別具体的な経験と集合的・歴史的な知との関係を明らかにすることができた。

次に、アフリカ地域研究における紛争・平和構築に関する議論への貢献である。現代アフリカの紛争に関する議論では、近代／伝統、外部／内部という 2 項対立的な分析枠組みが前提とされ、それらが絡み合った複合的な要因から発生している紛争に対し有効な解決策が提示されているとは言い難い。本研究は、社会変容やグローバル化と共に発展してきた予言者や神話をはじめとする文化的実践の影響力を、難民や女性、若者、年配者、政治的エリートなど様々な立場にいる人々の視点から検討した。本研究は現代アフリカの紛争に関わる多様なアクターによって形成される信念と、それが外部的な論理と邂逅する場に焦点をあてることで、既存の紛争研究自体が孕む問題を指摘し、オルタナティブな研究枠組みを提示できる可能性を有していると言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 橋本栄莉	４．巻 186
２．論文標題 予言者は紛争を終わらせることができるか？―― 南スーダンの旅する予言	５．発行年 2023年
３．雑誌名 季刊民族学	６．最初と最後の頁 80-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 橋本栄莉	４．巻 82巻2号
２．論文標題 南スーダンの紛争後社会における混成的秩序 ： 強制移動民の生活世界と「ものごとの国家的秩序」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 史苑	６．最初と最後の頁 110-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00021488	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 橋本栄莉	４．巻 82
２．論文標題 アフリカの若者の身体	５．発行年 2022年
３．雑誌名 史苑	６．最初と最後の頁 63-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 橋本栄莉	４．巻 82
２．論文標題 「本物の男」と「複写男」のあいだで ： 南スーダン紛争後社会における瘢痕とハイブリッドな「男らしさ」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 史苑	６．最初と最後の頁 79-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 橋本栄莉	4．巻 84
2．論文標題 紙／神と国家：南スーダン、ヌエル社会における混成的政治秩序	5．発行年 2019年
3．雑誌名 文化人類学	6．最初と最後の頁 78-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本栄莉	4．巻 8
2．論文標題 強制移動民が形成する自治組織の比較分析――南スーダン、ヌエル人の国内避難民および難民を事例として	5．発行年 2019年
3．雑誌名 難民研究ジャーナル	6．最初と最後の頁 114-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本栄莉	4．巻 18
2．論文標題 難民の実践にみる境界と付き合う方法：ウガンダに暮らす南スーダン難民の相互扶助組織を事例として	5．発行年 2019年
3．雑誌名 質的心理学研究	6．最初と最後の頁 76-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 橋本栄莉
2．発表標題 南スーダン紛争後社会における混成的秩序：国内避難民および難民コミュニティの事例から
3．学会等名 立教大学史学会
4．発表年 2021年

１．発表者名 橋本栄莉
２．発表標題 「本物の男」と「複写男」のあいだで ：南スーダンの紛争、瘢痕とハイブリッドな「男らしさ」
３．学会等名 立教大学史学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 橋本栄莉
２．発表標題 南スーダン難民の自助組織と実践:ヌエル人組織と若者演劇グループを事例に
３．学会等名 国際開発学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 橋本栄莉
２．発表標題 紙/神と国家：独立後南スーダン、ヌエル社会における政治秩序をめぐる想像力
３．学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Eri Hashimoto
２．発表標題 Transformation of Marriage and Kinship among Nuer Refugees in Uganda: Rethinking the Potential for Reorganization of the Community
３．学会等名 18th IUAES World Congress（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 橋本栄莉
２．発表標題 南スーダン難民と演劇：溶解する自他境界と「問題」への新たなまなざし
３．学会等名 日本質的心理学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計8件

１．著者名 遠藤貢，阪本拓人（編）	４．発行年 2022年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 274
３．書名 ようこそアフリカ世界へ	

１．著者名 木俣元一，佐々木重洋，水野千依（編）	４．発行年 2022年
２．出版社 三元社	５．総ページ数 680
３．書名 聖性の物質性――人類学と美術史の交わるところ	

１．著者名 Christine Mbabazi Mpyangu, Wakana Shiino, Eri Hashimoto	４．発行年 2021年
２．出版社 Langaa RPCID	５．総ページ数 364
３．書名 CONTEMPORARY GENDER AND SEXUALITY IN AFRICA	

1．著者名 児玉谷史朗、佐藤章、嶋田晴行、森口岳、東智美、太田和宏、権慈玉、柴田暖子、秋山道宏、設楽澄子、橋本栄莉、古川光明、江藤双恵、ミャグマル・アリウントヤーほか	4．発行年 2021年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 284
3．書名 地域研究へのアプローチ	

1．著者名 横浜国立大学都市科学部、佐土原聡、小池治、吉原直樹、橋本栄莉ほか	4．発行年 2021年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 1052
3．書名 都市科学事典	

1．著者名 松本尚之、佐川徹、石田慎一郎、大石高典、橋本栄莉（編著）	4．発行年 2019年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 270
3．書名 アフリカで学ぶ文化人類学	

1．著者名 吉野　晃（監修）、岩野　邦康、田所　聖志、稲澤　努、小林　宏至（編著）、橋本栄莉（著）	4．発行年 2020年
2．出版社 北樹出版	5．総ページ数 240
3．書名 ダメになる人類学	

１．著者名 佐川徹，竹沢尚一郎，松本尚之　（編集）	４．発行年 2024年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 292
３．書名 歴史が生みだす紛争、紛争が生みだす歴史―現代アフリカにおける暴力と和解	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関